

憶昔篇(下)

木島櫻谷

數へると三十餘年も前のことである、私が小學校を卒業してから二年程商業學校に學んだことがある、それは子供のことであるから自ら携んだ學校でもなく唯私の幼な友達が多くは中京の商家の子であつたから大抵この學校へ入つた、私も何の考もなくつい友達に引づられて入學したのであつたが、入つてみると此學校の重要課目の算術簿記商法などは皆嫌ひで殊に珠算の時間などは身ぶるひする程嫌ひであつた。却て縁遠い圖書國漢歴史などに興味を持つて日數を經るにつれてだん／＼此學校に嫌氣がさして來た。

本科の二年になつた時突然父の死に逢ひて學校をやめることになつた、或人は君に畫が好きであるから畫家になつたらどうかと説いた、なる程私も畫は嫌ひでない且つ曾祖

父は元常と云つて狩野派の畫家であつた、寛政内裡御造營の時御禮の擯達を拜命した一人である。其後中絶して居つたから、いつそ畫を學んでみやうかと思つたが、何分此時代のことであるから何だかまだ閑人の遊戯じみて、あまりに悠暢な仕事のやうに思はれてならなかつたから、さう直ぐに決心もつかず随分煩悶して居つた。

その頃少年園と云ふ雜誌を讀んで居つた。其中に當時の教育家で此雜誌の主宰であつた山縣禎三郎氏が——畫人となる亦快樂——と題して次のやうな意味を書いて居つたやうに記憶する。

畫は閑人の道樂や遊戯でない、國民精神の反映であり時代文化の精華である、將軍が陣頭に三軍を叱咤する

も宰相が廟堂に立ちて天下經綸の策を劃するも、學者が深遠な學理を講じて學界を裨益するもの、將た實業家が一攫千金の快腕を揮ひて雄を五洲の市場に争ふも快はいづれも快であり、ひとしく國家人文の爲に盡すのであるが畫人が一管の筆に萬象を驅使して焦燥と無味と枯渴の人生を美化して悅樂と耽美の別天地を開拓するのは人間の最も意義ある仕事で大臣大將や學者實業家の仕事と何等軒輊するところがないのみならず日本が世界に認めらるゝに到つたのは軍事にあらす産業にあらす學術にあらす實に東洋特殊の藝術に負ふところが多いのである、畫を好む少年は一日も早く藝術家の門を叩いて斯道の研究につとめよ。

宇宙の最大名譽は大臣にあらす大將にあらす實に藝術家の神通手にあり。

此頃としては洵に新しい所論であつて、それが鋭く少年の心をつき動かした、私の終始する世界はこれより外にならぬことを初て知つた、畫家の仕事は決して道樂や遊戯でな

い、先輩の驥尾に附いて一生を捧ぐるも亦可なりと茲に漸く私の進むべき方針を決することが出来た、かうなると今は矢も楯もたまらぬ、一日も早く畫の道に飛込みたい氣がしてならない、さしあたり亡父と親交のあつた先師の許に走ること決心した、それは二十五年の十二月中頃過ぎて世間はいづれも新しい年を迎へる準備、快殺されて居る時であつたが此春父を亡くした私は未だ會て覺へない悲しみにひたつてからまだ半年あまりしか経たないので、ともすれば當時のことを憶ひ出して甲斐なき涙にくれて居つたがこれからいよ／＼好きな畫の道に入ることが出来て更に新しい生活に轉じることが何より嬉しかつた。

入塾後初めて知つたのが瘦せた脊の高いソツ曲の男であつた、私より一つ二つは年長者であつたが三重中學を半途退學して一月あまり前に入塾したもので、僕は平子尙ですと名乗つたのが後年考古學者として佛教藝術の研究で世を驚かした平子鐸嶺君の前身であつた。氣焔家で随分ホラ吹きであつたが其頃から讀書家で、塾生中では自ら學者を以、

任じて居つた。半期あまりは一緒に勉強した居つたが將來あんなに偉くならうとは誰も思はなんだ。風采などは、とんとかまはぬ風で縫目の結びた羽織などを平氣で着て居つたが流石に將來あれだけの學者になつただけ書物を大切にすることは一通りでなかつた、實に可笑しい位であつた、私なども平子の下宿を訪ねて藏書を見る時は色々自慢話を聞せて——そんなに押へつけて見るな——そんな聞きかたをして呉れるな——とか六かしい小言を聞かされて割合に氣の小さい男だと思つた位であつた。

或時の出品であつたか平子君は竹に金鶏の圖を描いて居つた鳥の腹部の赤い色を繊細な朱の毛がきで描きつめて得意がつて居つた、或時は紅葉に啄木鳥の圖を描いて失敗した爲に大弱りに弱つて、あの負けぬ氣の男がとうとう先師に加筆をして貰つて喜んで居つたこともあつた。師宅の茶の間で二人杯をならべて描て居つたから當時のことをよく覚えて居る、いづれかと云へば晝は口ほどに上手でなかつたやうだつたが果して後年畫家を見かきつて、あれだけ立

派な學者になつた、法隆寺再建論で文壇を震へて居つた時などは、十八九歳で京都遊學時代の、三二で、この偉見るやうであつた。

その頃から淋脈縁結核だとか云つて悲觀して居ることもあつたが、やはり肺結核で早く世を去つたのは學界の爲に惜むべきことである。

私の入門したのは先師が四十八歳の時であつた當時京都の畫壇にあつて、年齢技量の相顔抗する人々は幸野梅嶺、鈴木松年、森川曾文、望月玉泉の諸家があつた年齢稍長じ閑歴又古き人々には森寛齋、岸竹堂、田能村直入、富岡鐵齋の諸翁があつた、殊に寛齋、鐵齋の二翁はその高邁なる人格と博識なる學識を以て共に時流を抜いて居つた、鈴木百年翁は私の入門の前年に世を去られた、その外に圓山派の中島有章、前川文嶺、文麟門下の山田文厚の諸家もあつたが如上の諸翁に比してあまりに振はなんだ。それよりも却て青年作家にして技量秀拔先望を凌ぐ人も二三ならずあつて互に相對立し展覽會の出品などは何々社中、何々塾と

姓名の上になを印を捺して各自の流派系統を明瞭に標榜してあつたから、丁度、旗幟堂々群雄割據の觀があつた、その間に於ける先師の努力も並大抵のものではなかつたらしい、平素の製作も随分自重して意に充たぬものは幾回も描き改めて居られたことを覚えて居る。

先師の門に入つた翌年に百年翁の三回忌が健仁寺でつとめられた、山内の各寺院に翁の遺墨と鈴木派の系統に屬する一般の作品が陳列された、先師及松年翁はもとより米俣翁も東京より來會して可なり盛會であつた、その時掲げてあつた肖像によつて初て百年翁の風采を知つたのである。

先師と松年翁とは同じく百年翁の薰陶をうけて技量聲望とも兩々相對峙して居つたが先師の眞面目な理窟嫌ひの性格と松年翁の辯論に長じ好んで濟輩を罵倒して自ら快とする性格とは全然あはなかつた様で平生の交際もあまり圓滑ではなかつたらしい、且つ松年翁は百年翁の長子であつて才氣もあり衝氣もあり負け嫌ひなところは、丁度昔の岸駒を髣髴せしめるものがあつた、殊に中年以後晩年に到るま

で動もすると父なる百年翁の門人であつた先師の聲望に壓せられることが多かつたから當面の敵としていつも先師を罵倒して居られたが流石に師匠であつた百年翁は學問の修養もあり寛厚の長者であつたから門人である先師の技量を推賞して居られたことは毎年花鳥畫譜の序文にある通りでその床かしい心情が窺はれる。

藝術家と云ふものは、大抵自負心の強い氣まゝものが多いやうだが各自の主義主張は別として廣い藝術の上からお互にその長するところを認めて何とか融和したいものである、その方が互に裨益することになつて斯道の上に最も喜ばしいことであらう、假令主義の上に相反することがあつても夫はどこまでも美しい君子の争でありたい、お互に感情に走つてその短所を指摘したり露骨な嘲罵を交ゆることは却てその人格が窺はれて面白くないことである。

米俣翁は早く東京に移つて居られたが、畫技以外に文藝があり博識であり加ふるに圓轉滑脱の才人であつたから早く國民新聞に關係して日清戦争にも畫家として従軍せられ

た。歴史に通じて大和繪の研究にも深く歴史畫など面白いものも少からず出来て居る。

米俣翁で思ひ出すのは其次男の金俣君である君は私と小學時代の同窓であつて吉さん／＼と呼んで居つた、米俣翁が東洞院錦小路の松年翁と向ひあいの家に住まれた頃で吉さんはその頃から畫が上手であつた、梅嶺翁の息東閣君もまた小學時代の同級で角さんと呼んで居つた、近頃はいづれも白髪でなければ禿頭のおやじになつて少年の面影はないだらうが吉さんは私などゝ違つて子供の時から風采もよかつたから二つ程は年長であつたが今日は恐らく私どもよりズット若く見えるであらう。

角さんと同級時代には梅嶺翁は六角室町西へ入る町内の北側で辨のある家に住んで居られた或時その門を出入する四五人の塾生たちを指して、

一番たけの高い人が一番上弟子である、

と角さんが私に話したことを覚えて居る、なる程たけの高い人だと子供心に思つたのが或は芳文翁であつたか、吉さ

んも一時梅嶺翁の門に學んで新町師小路の齋夢畫屋と掲げてあつた門を出入して居つたのを度々見たことがある。

同じ頃に寛齋翁は室町二條下る町内の東側に居られた表格子のあいだで居る時には塾生たちが製作して居つたのを立とまつて見たこともあつた。

いづれも私の六九歳から十歳位で明治十八年から二十年頃のことであるから考へると私も随分おやじになつたものである。

京都美術協會の出来たのも此頃である。私の向ひの家が事務所であつたから鐵齋翁の筆になつた京都美術協會と大書した看板が掲つてあつた、翁の飄逸高古な畫風も子供であつた、私の眼には唯ゆがんだ下手な字だこれが名ある學者の書かとおかしく思つたのも無理はない。

それより二三年後に青年繪畫共進會が開かれた。兄に伴はれて御苑内の博覽會場へ見にいつたことがある。

此頃は一般出品者に對して一定の畫題を定めて其製作を求めたのであるから限りある審査員が各自の見地に立ちて

規定の題意から作家の心匠を見やうとするのである。初心のものゝ研究としては或は一方法かも知れないが同一の畫題にしても人々の見方によつて無限であるべき筈の藝術を一畫題を定本としては勢ひその題意に拘泥せざるを得ぬであらう、作家独自の感興を尊びて自由に表現すべき藝術の製作を規定の畫題に因て局限することは随分無理なことであるが當時は東京の美術協會などでも出品に一定の課題を設けたやうであつた。丁度今の試験問題によつて受験者の答案をもとめるのと同じやうである。如何に立派な作品でも完全に題意にあてはまつて居らぬものは不合格となるのであらう。夫も畫題の解釋によつて各自違ふであらうに此時代なればこそ、これで出品が集つたので現時の展覽會には一寸見られぬことである。私の見た時は何でも寄花故事とか山寺鐘聲とか詩か歌かの題のやうなものが出て、兒島高德や藤原守忠度とか勿來關か醍醐化兒など色々あつたやうに覺へて居る。

その頃の畫の修業と云へば第一に運筆の手本によつて夫

々師匠の畫風を習字の稽古でもするやうに一生懸命に練習するのであつた、席上揮毫の如きも練習的に随分重要視されて熟の研究會にも必らずつきものとして席を設けてあつた。場かすをふんで慣れて居るものは、達者に筆をふるひ揮灑縱横と云ふ風で得意があつた、多くの塾生は勿論先師までもそれに加つて傍觀しながら——位置が面白くない——とか全體を毀した——とかいへば露骨な批評が出て慣れぬものは實にはづかしく顔がまつ赤になつて引さがることが度々あつた、私など意氣地なしは毎毎に心慮して是だけが胸につかへて居つたことを覚えて居る。

かやうに運筆を尊重して學畫上の第一條件のやうに考へて居つたから畫を學ぶものも席上で咄嗟の間に揮灑することが出来ないと何だかまだ畫家の資格がないやうに思はれた、それ故平日の製作はあまり妙でないが席上揮毫だけは感心にうまくやつてのける人も随分あつた。且つ相當地位のある人がよく席上で筆をとられたものである寛齋翁の如き大家でもその致年頃まで後素如雲社の例會に席上で筆を

として居られた。（一）
この頃よりズット後に明治卅年後素協会が主催で全國繪畫共進會を開いた時にも其餘興として——餘興と云へばいよ——變だが實際この時代でも畫家の席上揮毫を餘興として落語かニワカのやうに思ふて居つた——協會の會員が抽籤で否應なしに引出されて五六名宛が開會中に交る——席上揮毫に出席したが中には随分六つかしい注文を出された恥をかいたことがある。

世俗の——いろはたとへ——の中から石の上にも三年とか論語讀みの論語知らずとか針の穴から天のぞくとか一題づゝ頼むものがあつて意地の悪い依頼者がかやうな難題を出して畫家を困らして面白がつて居るものもあつた、それでも筆達者は當意即妙に苦もなくやつてのける人もあるがさもなければ大抵は恥をかくののである、眞面目な公開の席上でかゝるお慰みのやうなことは段々せぬやうになつたが當時は可なり盛なものであつた。

x

先師が柳馬場に居られた時は塾生の部屋が街路に接した六疊位の室とその二階の二室であつた、次の部屋が玄關で六疊に居る塾生が交る——來客の取次に出たのである。
鷹司家の儒臣で維新の志士であつた三國曲眠翁——三國大學鷹巢と號して彦根の儒家中川碌郎、京都の隱島松南の門に學ぶ——は先師の讀書の師であつたから晩年に先師の宅を訪はれて私は此玄關に迎へたことも幾度かあつた、鶴髮童顏で侍者を従へ杖を曳いてさながら仙翁の風姿を見るやうであつた。語られるところは詩書であるか畫談であるか將たまた夢のやうな往事の追懐であつたか、まだ子供である私などの知るよしもなかつたが何にしても浮生塵網の中を脱がれて悠々自適する仙翁の談するところはまた俗客のあづかり知るところでなからう、翁逝いて墓木既に拱し先師もまた泉下の人となられたから當時の高興は知るよしもない。

此玄關の二階が四疊半の茶室ですぐ表の六疊の塾部屋に續いて居つた二階も下も共に光線が悪く別して表二階は

天井が極めて低いから氣をつけぬと直ぐあたまを打つけるのであつた、隣接の家は相當大きい乾物問屋であるから夏などは蠅が多く窓からは變な臭氣が襲つて來て皆弱つたことがある、下の部屋は往來に而して居るから障子を開けるとすぐ腕白小僧や通行の人達が面白さうに立どまつて眺めるのである、格子を隔てゝはあるが丁度路傍で揮毫して居るやうで何だか嫌な氣がした、時には通りがりの犬や牛馬が無遠慮に落して行くので皆鼻を掩ふて障子を閉ぢたことも度々あつた、先師は奥二階を畫室にあてゝ居られたが、これとて薄暗い室で十分なものでなかつた。

入塾後初ての春先師が嵯峨へ花見に行かれるので十名程の塾生が羣をさけてお伴をしたことがあつた。

三十年あまり前のことであるから嵐山電車はもとよりのこと鐵道さへもまだ工事中で完成して居なかつたから、昔のやうに三條街道を牛や馬のお尻について菜たね花さくこがねの畦、麥の穂青き籾の間を縫ひ大空になく雲雀の音をきゝながら太藪を過ぎ渡目橋について、ある茶店に憩ふた、

花にうかれ酒に酔ひて放歌亂舞する喧噪の中に師弟十餘の一團は温顔や、紅を帯べる先師を中心にして嵐峽の清艶を賞で龜の幽遠を語りて興趣の盡くることを知らなかつた、當時の同遊も大抵泉下の人となつた。

x

廿七年の四月には先師は柳馬場の家をあけて寺町松原下の町の家に移られた、此時代は塾生も最多くいろ／＼特色のある友達も随分あつたから今に印象の深いものがある舊宅とは違つて附近は商賣の店家はかりで非常に繁華な町内であつた、畫家の住宅としては甚だ適はしくなかつたが奥深い露路の家で表通りの街路から彼是十間あまりも入つた奥に建物があつたから附近の騒々しいものは一切耳に入らなかつた、夫故かやうな賑かな街なかとして意外に靜かな別天地であるやうに覺へた。

この轉宅には手廻りの品など皆塾生が車を曳いて運搬したのであつた、私もまた生れてから曳いたことのない車のかち棒を握つて人通りの多い四條通を堺町にかゝつた時、

角の電柱を避けやうとしたが車と云ふものはなか／＼まう思ふやうに動かぬもので折悪しく反対の方から疾走して来た人力車に衝突してヒドク車夫に怒られたことがあつた。益裁用の支那鉢を包むために先師は描き預じの唐紙や畫仙紙の反古を山のやうに出された。山水もあれば花鳥もある全紙に九分通り出来て居る立派なものもあつた、塾生は皆自分達の新しい唐紙を出して鉢を包み吾がちに反古の奪合をした、私はその中から先師が畫用の印を幾つも捺されたものを見つけた、他日これを小さな帖に切張して先師の小印譜を作つたものが今に手許にのこつて居る。

運搬が終つてから多くの障子を五六名の塾生と共に裏を流れる高瀬川に浮べて洗つたことがある、その時折角洗つた障子が知らぬ間に流れてしまつて川の中を幾人かがマラゾン競争のやうに走つた、私はその時川底のビール壘の破片でひどく足の裏を傷けて心配したことを覚えて居る。

便所の掃除を命ぜられてツブヤク書生もあつた、大切な支那鉢を破つて奥さんの小言を聞いて居るものもあつた様な

用事はなるべく逃げて遊び半分の仕事ばかり手傳ふヅルイ男もあつた、何にしても若い塾生ばかりであるから一時間で出来ることを三時間もかゝつて漸く片づく云ふ始末ではかどらぬことも夥しい、二階座敷の中央に竹の皮包の段頭を開いて車坐になつて喰つて居る最中先師が或來客を案内して二階へ上つて來られたので一同は段頭の喰ひ残しを座敷の中央に置いた儘に皆蜘蛛の子を散らしたやうに物置の中にかくれたことがあつた、いろ／＼罪のない殿の中に五六日を経て轉宅の整理もすべて終つた。

先師は二階十畳の部屋を畫室にあてられて、その隣室で屏風などの大作をして居られた、此室と壁一重へだてゝ二室の物置部屋があつた、こゝが主として塾生の積古部屋にあてられた、元來この部屋は以前に炭や薪を入れてあつたから天井などは岡より張つてある筈はない、仰げば唯一つの天窓が丁度太陽がこの世界に君臨して居るかのやうな顔をして吾々を威嚇する如く下界を瞰んで居つた、一同は唯この天窓から照まれる光をうけて製作をしたのであつた、

四方は壁で中央の上部から光線を取入れてあるところは、なか／＼不平や小言どころでない、今日から考へると新しい設前になつた畫室とでも云はねばならない。

屋根裏には幾年かも掃除せなかつた爲に煤煙と蜘蛛の巣との合作になつた環路が一面にさがつて居る美ごとさはこの部屋の裝飾としてまことに適はしいものである、なる程蜘蛛と云ふ奴もなか／＼立派な藝術家だと感心したこともあつた。

それにしても壁があまりに汚れて居つたから一同は新しい畫稿用紙を寄附して張つた爲、すこしは體裁よくなつたのも束の間で見る／＼内に壁一面は立派な壁畫に化してしまつた、禪月大師のそれよりも一層奇抜な筆つきで塾生達の肖像が十六羅漢のやうに描かれた、その上に一々贊や題辭をかき添へるものもあつた、先師や奥様の特徴まで誰であつたか茶目の塾生が描いて居つた、新しい入塾者があるごとに羅漢が一人宛増してゆくのである、その頃某と云ふ新入塾生が例の通り壁畫の仲間入りをしたところが、その

男侮辱されたとでも思つたものが保證人を以てひどく抗議を申込んで來た、正直な先師はこの珍しい談話にこまられて、そのお尻が塾生へのお目玉となつたから一同は益興がつて——宰相でも大將でも漫畫の材料となつて随分翻弄されて天下に發表せられて居るじやないか、入塾生は師匠をめぐる羅漢群中の一人になつたので本當の修業はこれからだ抗議を申込むより鏡と相談するがよからう——と聲返したことがあつた、某はその儘塾へ來なかつたことを覚えて居る。

かやうな連中がかやうな部屋を巢にして居つたから蒲團の引はなしがある、着物のぬぎすがころがつて居る、竹の皮包の殘骸が散らされてある宛然梁山伯の籠城の觀があつた。

何分小さな窓一つの一方口であるから夏などは暑いことも夥しい、まるで蒸風呂の中に居るやうであつた、津田と云 男が下帯一つの素襦で畫を描て居た所へ突然先師が見に來られて急に着物をつけることも出來ず、手早く絹を張

つた尺八の棒を前にして絹張の盾のうしろに隠れたまではよかつたが、何分畫の描いてない絹のこと故真つ裸の大男があり／＼と棒の中に現はれて立派な裸體畫が出来あがつた、先師もあまりのおかしさに笑ひながら立去られたことがあつた。

これもまた同じ頃であつた、何でも廿八年の春頃かと思ふ、東京に青年繪畫共進會が開かれた、小堀、寺崎、山田、堀田、村田など十數名當時青年作家として鮮々たる人々が審査員であつた、私は此會に出品する爲に田舎女を尺五絹本に描いたことがあつた。

その時先師は私のすぐ背後に立つて見て居られた、氣が張つて仕方がないが今更やめることも出来ず、ともかく骨がきだけは済ましたが實は此時ほど弱つたことはなかつた先師は背後から、

さ お前のやうに氣張つて描くものでない、氣張りすぎては筆が固くなつて却て自分の心持が出なくなる、平氣で思ふ様に描けばそれでよい、あまり氣張たりぢ

へたりすると暢び／＼した心持が出ない。

と笑ひながら注意せられたことがあつた、私としてはこの場合氣張すぎたのも無理はない、絹本にかくのは僅に三度目であり且平日と違つて先師が背後から見て居られるかと思ふと自然氣張らざるを得ないやうになる、ヘマなことでもすれば、

それは何じやそんなことでどうなるか、

と一喝されるにきまつて居るから何でも小言を聞かないやうにウマクやつて見やうと思へば思ふ程腕が固くなつて平日に比べると何だか大い石でも結ぶてあるやうでどうにもこうにもならなかつたことを覺へて居る、考へてみると此時の先師の注意は簡單ではあるが畫人としては一生服膺すべきことだと思つた。

凡て氣張つて描く時の心理はその半面に必ずウマク描かんとか人に笑はれないやうにとか人を驚かさんとか外的な心持が潜んで居る、それは既に作畫の態度として不純である、すべて、のつ引ならぬ已むに已まれぬ心からの要求で

思ふだけ腹のふくれるだけ描けばそれでよい、人が賞めても笑つてもどうでもよい、世間の毀譽褒貶を心外に置くこそ作畫の本意であらう、作家の感情がおのづから高調して灼熱的になるのは固よりであるが唯對世間的な功名心名譽心がきざしては内面の已むを得ざるに出づる要求は、いつの間にか遠くに去つて唯外見を氣にする虚偽の表現に墮するのである、畫のみならず書でも詩でも文章でも凡て此點になると皆同じことであらう、人を驚さんとか功名を博せんとか對世間的な觀念が煩ひしてはそれぞれの心持が率直に現れるものでない、いくら洗練された技巧が人を驚かしても却て韻致に乏しく俗臭の鼻につくのもそれが爲であらう。

昔から高人逸士の世外に超然として心上何等の拘束がない爲に犯しがたい見識と自づからなる氣品を備へて居る。固より巧拙の問題でないそれ以上の問題である、精神的人格的或大なるものが現れて居る——畫はさう氣張つて描くものでない氣張れば却て心持が出ない——至極簡單では

あるが動かすことの出来ない眞理をふくんで居る、一生服膺すべきことだと思つたが、今日尙さう云ふ境地に立つこととの出来ないのは情づかしいことである。

その頃在塾のものとは通學生を合せて十名あまりが大きな角火鉢の中に圍みて例の天窓の下で雑談に花をさかしたこともあつた、此時代の塾生はうすぎたない薪部屋の天窓から恵まれた光の有難さを知らぬものはないから、合作になつた十六羅漢の壁畫も今はどうなつたか、近頃河原町線が出来て電車を通るやうになつた爲、このなつかしい稽古部屋も終に壊されてあとかたもないと云ふことである。

文庫をたゞひて下手な淨瑠璃をうなる風逸な有友、毎日書辨當を喰べるだけで朝から晩まで寝てばかり居る徹底的な不勉強でそれで畫は非常にうまかつた杉浦、漢學の素養が深かつた眞面目な河合、俳誌ホト、ギスの挿畫を描いて居つた左手の才人岡本、須磨から淡路まで平氣で泳ぐ海坊主のやうな名倉、いつも萬葉を鼻にかけて歌人顔をする大倉など随分特色のある人物もあつたがいつれも前後して泉

下の人となつた。

その外にも面白く遊び愉快に勉強した友人は誰も死んだ彼も死んだ不思議な程多く天折して三十年の春秋いかに有爲な人材を犠牲にしたかを考へると痛ましい氣がして泉下の友達が一層なつかしくなる。

x

廿八年三月には第四回内閣勸業博覧會が洛東の岡崎に開かれた。

外は日清戦争で當時の日本としては可なり大敵であつた老大國の支那を向ふに廻して砲火を交へ連戦連勝の勢すばらしく國內の元氣は頗るあがれる際であつたから裨々餘裕を見せた、この博覧會も當時としては相當に規模の大いものであつた、その美術館がまた畫壇に一時期を劃するものと云へやう。

日本畫では岩崎家の依頼で東西兩京の大家十名が顔合せに六曲屏風の力作で對峙した、その中でも雅邦翁の龍虎圖が非常な傑作であつたが通俗的な時眼に入らなんだ爲に却

て批評界の問題となつて世論の露々をきわめた、洋畫では新歸朝の黒田清輝氏の等身大の全裸美人が日本では恐らく初めであつたから一世の視聽を驚かして撤回の可否が喧しく論議されたが結局陳列のまゝ先帝行幸の時だけ白布で掩ひて事すみとなつたやうに聞いて居る。

これまで京都で開かれた展覧會は小規模な博覧會の一部で、舊御苑内の古風な日本建築の中に陳列せられたのである尺五か尺八か廣くて二尺位までの寸法で、形式も描法も従来の掛幅と大差ないものばかりであつたが、此會場ではじめて三四尺巾の大幅や、六七尺の横物など見なれぬ大作であり且つその圖題も手法も大分變つたものであつた、殊に雅邦翁の釋迦十六羅漢や龍虎の屏風、小堀納音氏の宇治橋戦争屏風などは場中の傑作であり非常な努力作であつたから今迄に覺へぬ驚異を感じた、小堀氏の歴史畫には私が畫を學ぶ以前から印刷を見て敬服して居つたが、肉筆を見るのはこれが初めてであつた、それは古作家に對して遜色なき阿氏一代の傑作と云つてよいものであつた、古土佐を

學ぶものはその優美な高雅な點は捉へ得ても大抵はその力強い濃厚な一面を逸しがちであるが此屏風などは戦争畫に適はしい力強さと重味は十分にあつて當時私の私も好きな畫の一つであつた。

先師は温健な筆で耶馬溪圖を描かれた、南宗味を帯びたその筆つきは此溪山の姿を現すのに最適はしかつた、竹内山元兩先輩は共に風景畫を出品して關東畫家に見ることの出来ない、特殊の健筆を以て當時の青年作家として會場に雄視して居つた、この外に東京の青年作家としては寺崎宗山(廣業氏は當時宗山の落款で出品してあつた)山田敬中(梶田半古、村田丹陵諸氏の出品があつたことは覺へて居るが觀山、大觀二氏の作品はなかつたやうである。

京都の出品にも傑作はあつたが私の特に引つけられたものは初めて見た爲か東京の作品に多かつたやうである、此美術館は四回勸業博の一部であつたが、會場も可なり廣大であり、出品も鑑査をしてその採否を決したから從來京都で見て居つた會とはよほど遠つた大さと新さを感じた、

私などは鬚筆を持つてから一年あまりしか経たなかつたので出品などはとても出来なかつた、唯會場に口參して好きな畫を見るだけであつた、先師の塾では大分出品したものであつたが鑑査の結果先輩の人が多く落選して比較的新しい人が入選した爲に、發表後塾内に一波瀾を起したこともあつた。

翌廿九年には全國青年繪畫共進會が京都に開かれた、森杏長は當時建築中であつた博物館長の山高信雄氏であつた審査員は京都の諸家の外に東京から寺崎廣業、山田敬中、村田丹陵の三氏が参加せられた、云ふまでもなく三氏は當時東京に於ける最も有爲の作家であつた、此時は私もつまらぬものを出品したが會場で見た東京畫家の印象は寺崎氏は黒地でアラレの綾地細輪巴の五つ紋で袂か脇のところを本紫の細い組緒でかよつてある羽織を着し、村田氏は小櫻皮の袴に白羽二重の緒を前で大きく結びて何のことはない、昔の武者修業のやうな、いでたちであつた山田氏は奈良朝文官の服裝で、三人三様の異つた風采が頼る目立つて居つ

た、さすが東京の畫家は風采から遠ふと妙なところに感心したこともあつた。

三十年には後素協會なる大合同が出来て京都のあらゆる畫系を網羅したが獨り鈴木松年翁の一派と岡山風の舊套を固守して居つた國井應湯氏などが加らなかつた、此會が主催になつて全國共進會が二回開かれた、小堀氏の櫻町中納言が受賞者の首席で前年の宇治橋戰争圖と全く違つた一面の優美そのものを遺憾なく現した傑作であつた、審査長は岡倉覺三氏であつたやうに記憶する。

後素協會の一部に後素青年會なるものが出来た、これは會員中の各塾の青年作家のみの會合であつて月々作品を持ち寄つて互評をするのであつた、且つ一年に一回は大會を開いて先輩に審査を請ふて居つた、この頃としては可なり活氣ある會合であつた、私と同輩の畫家で霞峰、翠峰、契月、五雲、華秋、耕雲などの諸氏は大抵この會での舊知である先年早く世を去つた信近春城氏は元氣な男でいつも此會合の論客であつた、飛田周山氏も東京に出る前にこの會合

の一人であつたことを覺へて居る、今は畫壇に忘れられて居る橋本菱華氏は竹内塾の先輩で、此會の重きをなして居た、その放膽な大まかな筆致で特色ある作風を見せて居つたが今日までよい意味で轉化して來たならば、現時の小器用な作家の中で慥かに異彩を放つたであらうに、中年蹉跌後は全く影を没してしまつたのは遺憾なことである、契月氏は當時から人物畫に巧みで殊に色彩に特殊な感能を持つて居る人と一般に認められて居つた、此の會も青年のみの會合であつたが可なり世間に認められて幾年か續いて居つた、その後、會の趣旨のことで私は意見を異にしたから其理由を述べて脱會した。

京都の畫壇も此頃から大分動いて來た、その題材に於ても表現の手法に於ても從來とは漸次變つて來て流派系統などによつて固く師風を守るやうな周陋なことは全然認めないやうになつた。

先師の塾内にも依然として師風を固守するものと師風以外に出で個性のまゝに動かんとするものと云はゞ新舊兩様

の區別が明瞭になつて來た。

東京から時々美術院展覽會を京都に陳列して新しい傾向を鼓吹した、この出張展覽會が京都の畫壇に多大の刺激を與へたことは慥かである、京都からも後素協會が主となつて東京に出張して展覽會を開いたことがあつた、その時東京の批評家は皆筆を揃へて、嘲罵を加へたやうに覺へて居る、當時はまだ地方的觀念にとらへられて或は京都から逆襲でもして來たかのやうに思つたのであらう、畫壇も批評界もその頃は随分秋意なものであつた。

京都畫壇の大家達はその頃からだん／＼時代と離れて來た、ついで起つた幾名かの壯年作家がその中心であつた、竹内、山元兩先輩などは外遊から歸つて後、その手法も題材も著しく變つてきたから後進のものは二家を追隨するものも少くなかつた。

後素協會が衰へてから京都美術會の繪畫部が一時はなかなか振つて來た、文部省が公設展覽會を開くまでは京都畫壇の上下を通じて此會の出品に大努力をしたのであつた、

中には随分東京の眞似をして露骨な美術院張りを見せたものもあつた、當時の出品中に多少でも新味を帯びたものはその題材に於ても、手法に於ても、院派の影響をうけたものか、さもなくば京都先輩の刺激をうけぬものはなかつたが京都畫壇の傾向は概して技巧や題材の上に變化を來たしたもので云はゞ外面的の新味に偏して居つた感がある、東京のそれは手法も新しかつたが主として内面的な動きであつたやうに思はれる、爾來幾年月を閲して東西兩京の長所が相接近し相融和しお互にその短所を補ふやうになつた、最近幾年は更に泰西の新しい潮流がおし寄せて茲にまた一大變化をうけるやうになつて來た。

後素協會が出来てから京都に於ける北派の大合同が成立して全國共進會を開いたり、出張展覽會を東京に催ふしたりして大に活躍をはじめた頃、田能村直入翁が自家の門下を中心に南畫家を融合して南畫協會を設立し南宗畫學校を興した、年に二回程大會を催ふして、新作品や明清諸家の名蹟を陳列し大に南畫の鼓吹につとめたのは、今日の南畫

院の前身のやうなものか、併し當時の南畫協會は近世の墮落した南畫より復古的な革新運動でもな、動きつゝある北畫に對して一種の反抗的宣傳と爛熟した形式的手法の鼓吹とに過ぎなかつたから前賢の勞勩を尋ねて眞の南畫精神に生きんとする覺悟でもなかつたやうに思はれた。却て畫家としてよりも學人を以て任じて居つた富岡鐵齋翁などの餘戯としての作品が眞に南畫の生命に觸れて居つたのも面白い現象である。

直入翁は田能村姓を冒し竹田の後勁を以て自らも任じ世間も認めて居つたから年齒の高きと共に斯界に重きをなして居つたが——尤も年齒に大分かけ値があつたことは當時の老人達の評判であつた——その爛熟した形式的技巧に拘束せられて筆墨の間に神韻の流露したものはあまり見られない。夫故常時の南畫協會の活動も猶燈火の滅せんとする際に少しく餘焰を添へるのに似たものと云へやう。

これに較べると現時の南畫院は二三の人を除く外は近世の形式に墮せる南畫の傾向を趁はずして自然の觀照に立脚

し自己の表現に出發せんとする態度は曩時の南畫協會と違つて賀すべきことだと思ふ。獨り南畫のみでないが特に南畫は古くから士大夫の技なりと誇稱して來たのに對しても人格と學問の修養が二つながらその根本精神に重大なる關係があると思ふ。昔から學者や高僧の餘戯に却て高古超邁の趣があるのも夫が爲でなからうか。

直入翁の没して後は協會の内部に統一がつかなんだか、久しからずして衰へた。

京都畫壇一部の作家によつて丙午畫會と云ふものが出來たのは丙午の歳であつたから文展開設に先きだつこと一二年、多分三十九年頃かと思ふ。漸次新しい傾向を帯び來る日本畫の態度をまだ手ぬるしと見て既成の展覽會に嫌らず思へる徳永鶴泉氏を首唱に千種掃雲、芝千秋二氏の外なほ二三の同志によつて組織されたものであつた。當時の日本畫としては、其題材に於ても手法に於ても随分急進的なものを發表して居つた、併し今日畫壇の趨勢に較ぶれば此會の作品もまだ／＼渾健な行方と見られるものであつたが、

その頃では可なり思ひきつた急激な變りかたで唯新しく見せんが爲めあまりに外面的な洋畫模倣に墮したものに見受けられて一般人士に好感を持たれなかつたやうに覺へて居る。幾回かの後に次第に振はなくなつたが或意味に於て慥かに畫壇の革新に先鞭をつけたもので比較的穩健な動きかたをして居つた京都の畫壇に對しては覺醒の烽火をあげたものとも見られる。これら作家の發表した作の可否は別として二三氏の殉教的な眞剣の態度であつたことは、當時を回想して敬意を表せねばならぬと思ふ。

徳永鶴泉氏は或佛教の學林に教鞭をとつた人で早くから泰西の藝術に理解をもち傍ら河田小龍翁に南畫を學びて漸くは先師の門にも關係して居つたことがあつた。本來は學究で随分熱のある奇人であつたが其後久しく逢はない。

如上の會とは別途にあつて日本畫と洋畫との接觸融合に力を盡した人は西洋畫の先輩淺井忠氏であつた。

淺井翁は茲に説明する迄もなく前期洋畫界の大家であつたが東洋畫にも多大の理解と興味を持つて居つた人で、自

家の洋畫に於ける寫實の根柢を以て宗達や光琳の研究に深かつたから裝飾的な面白い創作を發表せられたことも數々あつた。私は翁の在世中に或は熊野神社前の寓居に、高等工藝の畫室に、或は東京の旅寓に幾度か翁を訪ねて作品を見もし畫論を聞いたこともあつた。

風流温籍の人で後進子弟を指導して倦まなかつた。現時洋畫界に重きをなせる梅原、安井の二氏もまた淺井翁翼卵の恩をうけた人である。

京都畫壇の趨勢が幾轉變の後今日に到つたのは主として幾多先輩が鼓吹と指導によるのは勿論であるが間接にはまた淺井翁の如き人が日本畫の圈外から刺激され誘發されたことも決して少くなかつたと思ふのである。

獨り京都畫壇のみならず、東都の畫壇もまた恐らく同じやうに時代の轉變と共に幾度か似たる蹊路をふんで今日に到つたのであらう。龍池會が日本美術協會となり一般美術界に覇を唱へて動かすことの出來ない勢力を張つて居つたが二十九年か三十年頃に初期の日本美術院が出來て革新の

烽火をあげて以来、新舊兩派の闘争も可なり續いて後四十年の文展開設に到つたのである。官設の力で在來の協會派と美術院派の巨頭も一時は文展に合同されたが再び分れて美術院の再興となりて、官展に對抗して大に民間派の氣をあげた。初期美術院の主腦であつた岡倉覺三氏や橋本雅邦翁の畫壇の革新に貢獻されたことは非常に大なるもので獨り東京のみと云はず實に日本の藝術界に展開の氣運を與へた主動者であらう、文展の二回目的時に岡倉氏の卒ひた玉成會と云ふのが開かれたが一回でやんだやうに覺へて居る、異畫會の展覽會がまた可なり盛であつた。尾竹氏兄弟や今村紫紅氏、高橋廣湖氏などが活躍して居つたが幾年の後次第に衰へた。

現在の日本畫壇は單に在來の傳統的形を套襲せずして眞に東洋畫の本質に生きんとする努力や、或は泰西藝術の精華を咀嚼して新しき境地を開かんとする運動や或は上代に逆つて大和繪の手法に現代の思想感情を盛りんとする研究や自然の靜照と自己の表現より出發せんとする新しき南

畫の態度や何と何と凡てに於て覺醒し來れる畫壇の前途は作家をして一日も舊態に晏然たらしめない状態である。

藝術が時代によつて轉化し來るのは恰も大海の波瀾の如きものか、一つの波瀾がおこつて其波のうねりが低くなるに更に次の波が高くなつて來る、夫から夫へ次から次へと波瀾重疊してその間に自づから聯絡がある一時代へ新しい運動がおこつて來ると、それに對して次第に追隨者が出て來て當初の精神は終に薄らぐにつれて更にまた斬なる他の運動がおこつて來る。かやうにして新しいものが次第に古くなり古きものがまた新しく見へて、繰返し／＼時代の先覺者によつて生かされて來るのであらう、氣運の展開が將た人間の努力がいづれにしても時代を離れた度い上から考へると恰も大海の波瀾に似たものがある。自然科學の研究が微に入り細を穿ちて、先人未發の發見の爲に既往の學說が根底から覆されるやうなものではない。本來自己の表現を以て第一義とせる藝術にはいづれが正しく、いづれが

正しからぬものは固よりない。平かな水面に高く低く跳つて居る差はあつても、等しく波瀾たるに相違なからう。唯動く波瀾の高所に立てるものは一時代を代表する作家であり波瀾の低所にあるものは先覺者のもとに追隨して動くものであつて、また次の波瀾に押されて茲に時代が變るのであるまいか。

かやうにして一波一瀾、一高一低のうちに畫壇の趨勢が今日に到つたのは人間の力でどうすることも出來ない氣運のおのづから然らしめるのであるが、また一つには時代を知つた先覺者の努力と鼓吹にまつとごも少なくない。思へば三十年あまりの夢である。過ぎ去つた月日の駛さと變遷に驚かされる。

x

宮城の西溜に掲げられてある綾織富士のまき狩圖は先師が原畫をかゝれたもので二十八年の五月頃であつた。

先師はこれが爲に堀野の寫生に出かけられて幾回かの畫稿が、いよ／＼定つて夢寺町のある寺を借りて揮毫せられた、死んだ有友や杉浦など、一緒に四五人の學生がその下

彩色を手傳つたことがあつた。寺の庭に立葵や紫陽花のさきかけた頃から着手して秋老けて芙蓉の花もすがれ種子のこぼれる頃に出來あがつた。裏の墓地には大きな栗の木が幾株もあつて、風のふく日などは見事な栗の實が墓場一面に落ちたから、肝腎の畫筆など手につかや皆我がちに粟拾ひに無中になつたことを覺へて居る、考へるとまだ無邪氣なものであつた。

京都畫壇の書斎養齋翁は二十七年に幸野梅嶺翁は二十八年の春に岸竹堂翁は三十一年に皆世を去られて當時五十四五歳の先師は頗る元氣で關西の重鎮として名聲が愈高かつた。

先師が堺町の新宅に移られたのは三十一年五月頃であつた畫室も座敷も改築せられて今までの借宅とは違つてなかなか立派なものであつた富岡織齋翁は宋郭熙の畫論中から養素の二字を摘て額に書して先師の新居を祝された、養素齋の號は此時からである、向側に瀟洒な別邸を建て、庭の大部分は趣味の盆栽を幾十百も置かれた、或年の初夏であつた先師は雲藏の紫藤の盆栽を十餘鉢も陳列して同じ趣味

の友達を幾人が招じて清興をつくされた、正面の床には皆川淇園の藤花を詠じた七絶の幅が掲げてあつた花の色や、淡くして糸の如く長く垂れたる或は房みじかくしてゆかりの色濃きものなど多様な様に一室のうちは紫雲捲曳して興趣云ふばかりなかつた。

此邸の應接室はすぐ奥座敷に接して前に四坪程の中庭を隔て、表の書生部屋に向ひあつて居つた壁上には鐵齋翁の養素齋の三字額がかゝつてあつた、その飄逸高古天趣の技ある書風をいつもうれしく思つた、中庭には牛の臥ておる程の大きい奇しい姿の石と婆娑たる緑竹、幾基の春蘭が石の根に添へられたゞけで自然の風趣が十分にあつた、いつも此庭を前にして先師と對座しながら畫談や追憶を聞いたことが思ひ出される。

x

先師が名利南禪寺の法堂に龍を描かれたのは堺町時代の末の方であつた四十一二年の頃かと思ふ。

法堂は往年祝融の災にかゝつて久しく再建も出来なかつた、禪門の大徳豊田善法師が美濃の虎溪より來つて南禪寺

を重修されてから禪師の徳に歸依して集つた淨財で初めて舊觀を復するやうになつたのである、禪師は法堂の龍の畫を先師に依頼されてから禪師と先師の間に非常に親いつながりが出来た、元來先師は代々高田派の信徒でその別院に墓地も歴然とあるに拘らず龍の畫の奇縁によつて深く禪師に歸依して永久に瑞龍山の靈地に眠りたいとの望であつた禪師もまた先師に酬ゆるに山内の勝地を割いて早くから壽藏碑が建て、あつた。

先師の因縁によつて私もまた數々禪師と接するの機會を得た、或時は先師と同席し或時は金地院庭内の幽居に禪師を訪ねた、松籟靜なるところ、方丈の室に小机を置きて數卷の經に對する高僧の氣高き姿は今尙目の前に見るやうである、侍僧を従へて老軀をはこび衣笠の新居を訪ねて手造りの茶盃を恵まれたことも思ひ出される。

學邃く徳高く寂然として動かさることは聳ゆる山の如く端然として靜なることは湛へる水の澄めるにも似て無言の間に人を壓服する力があり温顔の中に人を薰化する徳が見へる、一面には極めて嚴肅な力強さと一面には云ふばかり

なき愛撫と抱擁のあたゝかさを感じた、私などの凡骨に接しても禪家の所謂機鋒辛辣な風は少しもなく唯俗半凡な談話の間にも不知不識異常な大きな力にひきつけられておのづからなる淨化を覺へるのであつた、生きた人と云ふよりも山に對し水に臨み大自然に抱擁される心地がした、恐らく禪門に得易からぬ大徳であらう、先師の歸依して居られたのも尤であると思つた。

禪師の遷化より幾年かおくれで先師もまた生前の望み通りに瑞龍山下松風靜なるところに眠られるのである、獨り法堂の龍は長しへに禪師と先師の靈を宿して居ると見てもよからう。

x

昨年春は亡父の三十三回忌にあつたつたから南禪寺で法要を籌み遺詠を集めた小冊子を近親の間に頒つた。

父が在世の時に中の閑を樂んだものは茶と歌であつた、たそがれ時に獨り机によつて歌句を案じ舊稿を改めて居つた、四疊半の裡にたぎる茶の音を聞きながら茶をたで、世務の煩しさをしばし忘れるのであつた。

秋老けて庭の柘榴の黄ばんだ葉が、時雨する毎に丸木の椽に散りかゝりハラ／＼と障子に觸るゝ音など云ふばかりなき閑寂な詩境にひき入れられた。初雪のあした、積れる雪を釜にうつして一盃の茶味に冬の日の短きも知らず心あへる友と語るのを樂んで居つた。私の少年の頃亡父がこの粗末な茶室に先師を招じて閑談して居つたことを覺へて居る、父歿して三十年、先師もまた思ひがけなく、かりそめの病つので八十年の生涯を終られた。

先師永眠の地は即ち亡父埋骨のところである、三十年を隔て、師父の墳墓は、はしたなく咫尺の間に相接してゐるへだつるものは、唯楨の一重のこみ垣である、師を憶へば必ず父を憶ひ父を憶へば必ず師を憶ふ、南禪寺に來る毎に二つの墓を拜して先師のいませし時を憶ひ兼ねて亡父のことども憶ふて盡せぬ追憶にふけらぬ時はない。

空山の裏、松楸の閑。泉下の眠安らげき先師と亡父の靈は共に茶味を語り畫趣を談じ一笑手を拍つて高軒は長しなへに盡きないであらう。

(大正十五年六月)